

令和6年度サポートルーム 運営計画

1 趣旨

長期欠席の生徒や集団生活になじめない生徒に、学びの場を保障し、多様な教育機会を確保するために、校内にフリースクールを設置し、生徒たちが安心・安全に生活できるようにするとともに、生徒個々の成長を支援し、*社会的自立を目指す。

2 運営方針

- (1) 次のような状況に該当する生徒の校内での安心・安全な居場所を目指す。
 - ① 心身の不調等の理由により、長期欠席が続いている生徒。
 - ② なかなか学校へ足が向かない、もしくは学校へ来ても教室へ入れない状況にある生徒。
 - ③ 対人関係等がうまくいかず、集団で生活することが難しい生徒。
 - ④ そのほか、心のエネルギーが不足して学校生活に支障をきたしている生徒。
- (2) 教室復帰が前提ではなく、個々の生徒の社会的自立を目指す場とする。
- (3) 長期欠席の生徒の状況を把握し、その生徒に合った支援を行える環境を整える。
 - ① 室内の環境を整え、生徒の心が落ち着くような場所にしていく。
 - ② その生徒の状況に合った支援を考え、計画を立てる（生徒自身の自己決定できると良いが、無理はしない）。きちんとした計画がない方が来やすい生徒もいる。
- (4) 生徒の自己決定を促し、「ありたい自分」を見つけられるような場所を目指す。
 - ① その生徒の良さや得意なことへの気づきや自己認知を促す。
 - ② 提案はするが、最終決定は本人に委ね、自分で決定したことに責任を持つ経験を積む。
 - ③ 共感的な人間関係づくりを目指し、様々な活動を共にする中で、自信をつけさせたい。
 - ④ 教室へ戻って生活するかどうかを含め、自分自身のゴールを自分で決められるような支援を行う場所にする。
- (5) 小集団の良さを生かし、社会的スキルを身に付け、対人関係への不安を減らす。

3 運営方法

- (1) 主に長期欠席生徒の状況を把握し、どのような支援ができるかを検討する。
 - ① 令和4年度の様子から、長期欠席や教室に入れない状況にある生徒の現況をつかむ。
 - ② 主に学年会でスクリーニングを行い、サポートルームでの支援が必要な生徒をピックアップする。
 - ③ 生徒本人、保護者へサポートルームの存在を周知する。
 - ④ 学級担任、生徒本人や家庭と連絡を取り、どのような支援が可能か（有効か）を検討する。
 - ⑤ 検討した結果をもとに、できそうなことから少しずつ取り組んでいく。
- (2) 実際に支援を行う。
 - ① サポートルームは常時開放を基本とする（常駐職員が対応）。
 - ② その生徒に合った支援を行う（可能なら支援計画を作成）。複数の生徒が同時に利用する場合でも、それぞれの生徒に合わせた支援が実施できるようにする。

具体的な過ごし方の例

- ・教室とオンラインでつないで授業に参加
- ・自分の得意なものに取り組む
- ・短時間の滞在（本を読む、談話する、遊ぶ等）

※過ごし方は多種・多様である。その生徒の状況を踏まえて支援の方法を模索していきたい。

4 具体的な支援で心がけること（職員間で共有するマインド）

- (1) 支援の基本は“待つ”こと。
 - ・心身が健全な生徒は、自ら次の展開を望もうとすることが多い。まずは、十分な休養と安心・安全な環境の中で、心身を元気にすることを基本に考える。学校に来られたことが素晴らしい。
- (2) 過ごし方の多様性を認める
 - ・1日の過ごし方については、基本的に本人の計画・決定を尊重する。否定やネガティブな言葉は一切かけない。その計画・決定の中に、変化や成長を感じるものがあれば大いに認め、励ます
 - ・自分自身の決定には最後まで責任を持たせる。
 - ・はじめからルールありきにしない。大概の子どもたちは、節度をもって過ごす。目に余るものや疑問に感じることはその都度話し合い、必要に応じてルール化すれば良いと考える。
 - ・個人で過ごすことが前提だが、小集団の良さを生かし、数人で会話や遊び等を楽しむことを通して、社会的スキルを身に付けていくことも大切にする。
- (3) 生徒指導の三機能を活かす
 - ・生徒との関わりにおいては、生徒指導の三機能（自己存在感を与える、共感的な人間関係を育成する、自己決定の場を与える）を活かし、一人一人の自己肯定感を高めることを大切に考える。
- (4) 多様な価値観に触れる機会を大切にする
 - ・校内外の様々な人との出会いの場、つながる機会を大事にし、多様な価値観に触れられるようにする。
- (5) 職員間での合意形成を図り、チーム支援にしていく
 - ・即時性の高い情報共有を心がけ、常駐職員がつなぎ役となってチームで支援できるような体制をつくっていく。
- (6) 保護者との合意形成を図る
 - ・学級担任と連携しながら、タイミングを見て保護者との合意形成の場を設定する。特に学習や成績については、通常学級と同じようにできないことを丁寧に説明し、理解していただく。
- (8) アセスメントを活用した支援計画の作成
 - ・各種アセスメントを活用し、多面的、多角的な視点で生徒個人の状況を把握する。その上で、個別の支援計画を作成し、支援の見通しを立てる。
- (9) 特別支援教育との連携
 - ・生徒の実態や必要に応じて、特別支援教育の視点からのアセスメントや支援を検討する。

5 その他

- ・サポートルームを利用する生徒個人のクロームブックは、サポートルーム内で管理を行う。（学級担任と確認）
- ・年度当初に全校生徒への周知を行い、サポートルームを利用する生徒をあたたく見守ってもらえるように働きかける。

*社会的自立 … 社会的自立の在り方は一様ではなく、個々の状況によって異なるものであるが、サポートルームで目指す社会的自立とは、

①自分で考え行動し、自分の決定や行動に責任を持つこと

②社会とつながり、社会的スキルを身に付けること

の2点を柱として考えている。

令和5年度サポートルームの成果

1 サポートルームチームでの連携の具体

- ・主に3名の教員が交代で常駐している。教員が入れない時は、心の教室相談員が支援してくださっている。職員のいない時間があまりない。
- ・活動場所が複数にまたがる場合、それぞれに職員がつくことができるのが強み。
- ・生徒の成長や変化を、その都度チーム職員で共有し、支援の方向を決め出している。
- ・子どもたちにとっては、複数の職員と関われることで、多様な価値観に触れたり、自分の話しやすい先生に相談したりすることができることにつながっている。

2 個々の成長を支援するためにそれぞれの子にどのような支援をしているか

- ・子どもたちの心のエネルギーが充電されるまで「待つ」ことを基本とした支援に徹している。その中で、子どもの変化を見極め、適切なタイミングで次の展開に向けて背中を押してあげられるような準備を整えておく。
- ・チーム職員や学級担任が生徒・保護者と面談し、個々の目標設定を行う。その目標に向けて、一人一人にどのような支援をしていくのかをその都度検討している。
- ・学級担任と密に連携し、その子の中・長期的な見通しを立てながら、今できることに取り組めるような環境を整える。どのような支援を行っていくかはケース・バイ・ケースである。
- ・学習に気持ちが向いている生徒は、教室の授業をリモートで受講したり、自習をしたりできるような環境づくりを支援する。教室へ戻ることや、教科の成績をつけることを目標にしている生徒の場合は、どのような授業参加が可能かを検討し、提案する。その際、教科担当との打ち合わせを綿密に行い、評価計画を立てていく。
- ・学習に気持ちが向かない生徒の場合、1日の過ごし方を相談しながら決めていく。こちらから提案はするが、本人の気持ちが前向きでない時は、無理をしない。学級担任が働きかけてくれたことを後押しする。

3 個々の社会的自立を促すために、それぞれの子にどのような支援をしているか

- ・1日の過ごし方を自己決定することによって、スケジュールを管理する力や計画性を身に付ける。
- ・少人数での遊びや体験的な活動を通して、コミュニケーション能力等の社会的スキルを身に付ける。
 - ・様々な人と関わる機会を設定することで、多様な価値観に触れ、視野を広げる。
 - ・自分自身と向き合う時間を大切に、自己理解を進める。

4 生徒の言葉でサポートルームでの学びでどのような力がついてきたか（生徒の具体的な言葉）

- ・1年生のときは1週間に1回くらい学校に来ていたけれど、2年生になってからは1週間に2・3回くらい学校に来て、1年生のときよりも勉強することが増えて良かった。友達に誘われて、休み時間に教室や体育館に行けて嬉しかった。(2年女子)
- ・みんなとしゃべれて楽しいので、学校に行こうと思える。(クラスで) 授業を受けた後、サポートルームで自分の時間が作れるので、心が落ち着く。(2年男子)
- ・自分には自覚できることはありませんが、周り(の友達や先輩)が心を開いていることはたしかです。Sくんは小学生の頃より明るくなったし、S先輩は最初よりもたくさんしゃべれるようになったし、Iくんは自分に心を開いてくれた。この部屋は、みんなにとって大切な居場所だと思う。

(2年男子)

- ・サポートルームに行くようになってから、学校に行けるようになった。学校へ行くことのハードルが下がった。サポートルームへ行くことによって生活リズムが整うようになった。(飼育している)魚たちと触れ合うことができ、エサをあげるのが楽しみ。(3年男子)
- ・サポートルームへ登校するようになって、とても学校に来やすくなった。家にいる時間よりも気持ちが前向きになった。金魚など、動物の飼育をするのがとても楽しい。とても居心地がいい。
(3年男子)
- ・自分の体調を1番に考えながら過ごすことができた。9組の授業に出たり、自主学習を進んで行ったりできた。(3年女子)
- ・クラスに行きづらいので、クラスの人があまりいないサポートルームがあることで、毎日学校へ行くのが(気持ちの面で)楽になった。1人で静かに過ごすことができ、私にとって安心できる場所なので落ち着いて生活できることが頑張れる理由かなと思う。(3年女子)

5 長野大学の学生(・どのようなことをやり、→どのような成果があるか)

- ・少人数での遊び(ゲームやクイズ大会等)
→コミュニケーション力の向上、相互理解、企画・運営力の育成、成功体験、自己有用感・主体性の向上
- ・共同活動(折り紙での作品制作・スポーツ)
→集中力の向上、自己有用感
- ・テスト前の教科学習
→子どもたちの学習意欲の向上、学習習慣形成、探究心
- ・会話、コミュニケーション
→人間関係づくりへの自信や積極性、自己肯定感の高まり

6 長野大学の学生の関わってみて学んだこと(生徒に対しての思い等)

- ・将来子どもたちに関わるような仕事に就くことを志望している学生が多く、サポートルームでのボランティア体験は、よい刺激になっていることが感じられる。毎回記入していただいている感想からは、子どもたちとの関係づくりの難しさを実感したり、大学生自身が自己をふり返り、その都度新たな課題を設定したりする姿が見受けられる。中学生・大学生双方にとって有意義な時間になっていると感じられる。

7 持続可能な体制づくりのための今後の方策

- ・T(Time:時間) P(Place:場所) P(Person:人)のマネジメント
→上記の3つがそろっていることが前提。場所に関しては、既に整備されているため、今後は時間の融通が利くように、適切に職員の配置ができるかどうかを鍵。
- ・現在の状態を維持するためには、加配の職員配置が欠かせないが、もし加配がつかない場合について、以下のようにすれば現状に近い状態を維持できると考える。
→SRチーム職員と同じマインドをもつ職員が複数で担当し、各担当の授業のコマの中にSRを配置する。各担当は、授業を担当しながら、SRにも入る。
- ・ただし、SRを担当するのは、誰でもよいわけではない。不登校生徒に寄り添えるようなマインドを備えた職員が、少数で担当できるのが望ましいと考える。

8 不登校・不適応生徒数を削減できた成果の具体

- 令和4年度不登校・長期欠席生徒数 42名 → 令和5年度末 28名（病欠を除く）
※内サポートルーム利用者 16名
- 令和4年度末から5年度当初に教室へ復帰できた生徒 … 3年生女子1名、2年生男子1名
- 令和5年度3学期に教室へ復帰できた生徒 … 2年生1名
- 令和5年度から登校できるようになった生徒 … 3年生 5名 2年生1名

9 今後の課題

- 3年生の進路決定の在り方。どのように合意形成を図っていくか。
- 特別支援教育、外部機関との連携を強化し、それぞれの特性に合った支援を講じていくこと。
- 学習をメインに過ごしたい生徒、学習に気持ちが向かない生徒の共存が難しい。
- 予算運用。必要な物品を購入するための資金が必要。